

狩野 未帆

福屋研究室

設計主旨

ここはかつて、仙台空襲によって家を焼き払われた者の600戸もの仮設住宅が建ち並んでいた。行政の意向から水道、ガス、電気、道路、街灯などの生活に必要とされるものが整備されることなく、戦争から3年後、立ち退き要請が始まった。しかし、住民たちここで生きて行くことを選択した。

水を引き、自らの手で街灯を

かりを焼け、自らの手でぬか道にアスファルトを引いた。

しかし、今はどうだろうか。  
大量にものが溢れる中で、手を伸ばせば向でも手に入る時代。共に生きる必要性が気配を消そうしていた。

追廻地区の暮らしを見てみよう。貧いからこそみんなが前向きだった時代へ人間にとって何か幸福なのか。しかし、この追廻地区が消えるということは、この疑問すら消えてしまうことなのだ。

